

押尾 高志（千葉大学大学院社会科学研究院、特任研究員）報告

[Faiths crossing linguistic boundaries: A comparative study of Moriscos and Tatars]

報告パネル名 [PA-170. The cohabitation of religions in the Middle Ages]

報告パネル開催日時 [2018年7月18日（水）11:30-13:30]

・報告内容および会議参加についての感想・雑感

今回の報告では、16-17世紀のスペインとロシアにおけるムスリム住民に対するキリスト教への改宗事例を比較研究することを目指した。スペインのモリスコ（カトリックへの改宗）とロシアの受洗タタール（ロシア正教への改宗）の両事例において、言語教育は宗教教育の一環として行われた。そのため、言語や文字は各々の信仰を体現するものとして認識されていたが、改宗者のなかには、信仰に基づいて引かれた言語的境界を越えることを試みる者たちも存在した。西・露の事例の比較を通じて、近世における改宗者の言語と信仰の関係に関する思想潮流の一端を明らかにすることが本報告の目的であった。

報告パネルが「中世における諸宗教の共存」という題で組まれていたこともあり、パネリストたちの扱うテーマは、イスラーム世界における宗教的マイノリティやイスラームと他宗教との関係性やそれに伴う表象について取り扱ったものが多かった。パネリストは報告者も含めて6人であり、持ち時間の20分のなかで報告・質疑応答を行う必要があった。本報告にも、質問・コメントが寄せられ、そのうちのいくつかは、比較研究を進める上で重要な示唆に富むものであった。聴衆の中には、モリスコ研究の専門家もおり、報告終了後お互いの研究について議論を持つことができたことは大変な成果であったと言える。

また、会場では、旧知のアメリカやスペインのアンダルス・マグリブ研究者と再会し研究交流を深めることができたことは大変有意義であったが、今回の WOCMES がアンダルスやその遺産を前面に押し出した会議であったにもかかわらず、その一端を担うマグリブ、特にモロッコの歴史研究者の参加者が少なかったのは残念であった。

